

《 論 説 》

前4世紀アテナイの海上同盟とペルシア帝国

阿 部 拓 児

論文内容の要旨

ペロポネソス戦争とコリントス戦争という二大戦を経た後、ギリシア世界の覇権を掌握したのはスパルタであった。このスパルタ勢力に対抗すべくアテナイがとった策は、前377年、リュザンティオン、キオス、ロドス、テバイなどの諸市と軍事同盟を結成することであった。後に第二次海上同盟と呼ばれることになるこの同盟は、前355年、同盟諸市らの反乱により勃発した同盟市戦争により事実上、瓦解するも、形式上は前338年にフィリッポス2世がギリシア世界を征服するまで継続した。

第二次海上同盟に対する研究、とりわけその外政面に関しては、概して「第二次帝国」（或いはデロス同盟の復活）という見解が有力であった。これに対し、J. L. Cargill は史料の洗い直しを行うことにより、第二次帝国を否定するに至った。彼の意見によれば、帝国的と考えられている行動は同盟諸市の了解内において行われており、アテナイが設立当初に掲げた同盟規約に違反することは決してなかった。

これらの意見はいずれもが、アテナイと同盟諸国との関係というギリシア世界内における動向を第一に考え、ペルシア帝国を二次的なものとして考えている。しかし、ペロポネソス戦争以来、前4世紀を通じてペルシア大王と太守らは幾度となく、直接或いは間接的に、ギリシア諸市に介入している。特に、コリントス戦争の講和条約として締結された大王の和約は、ペルシア大王のギリシア諸市に対する影響力を明文化したものであった。そこで、筆者は第二次海上同盟期アテナイの対外政策を、アカイメネス朝の視座から捉えなおす必要性を感じた。

筆者は主に、二人のペルシア大王—アルタクセルクセス2世とアルタクセルクセス3世—の政治的意図に着目し、ギリシア世界の動向を、どのように解釈し得るかを検討した。ペルシア大王は、ギリシアを小アジアに進出させないように気を配りながらも、ギリシア世界の覇権をいずれのポリスが掌握するかについては、関心を持っていなかった。そして、このペルシア大王とギリシア諸市との間の微妙なバランスの崩壊が、古典期からヘレニズム期への移行における、一つの重要な契機となったという結論に達した。

は じ め に ——— 研究の意義と問題の所在

前5世紀後半のペロポネソス戦争、前4世紀初頭のコリントス戦争という、ギリシア世界を二分して争われた大戦を制したのは、いずれもスパルタであった。当時、ギリシア世界を席卷していたこのスパルタ勢力に対抗すべく、アテナイが講じた策は、軍事同盟を結成する

というものであった。後に第二次海上同盟（以下、第一次海上同盟＝デロス同盟と特に区別しない場合は、単に海上同盟と略す）と呼ばれることとなるこの軍事同盟は、前357年、主要同盟諸市らの反乱によって起きた同盟市戦争によって形骸化するも、フィリッポス2世によって最終的に解体されるまで、約半世紀近く存続することとなる。

海上同盟についての研究は、主に同盟議会や同盟国内の裁判権問題などに着目する内政的問題を取り扱う研究と、海上同盟期におけるアテナイの対外関係に着目する外政的問題を取り扱う研究とがおこなわれてきた¹⁾。とりわけ後者の研究においては、すでに古典的となっているF.H. Marshallの研究以来、海上同盟の再帝国化が指摘されてきた。これらの説によれば海上同盟はその設立当初、アテナイの再帝国化を未然に防止する制裁規定や、それらの行動に対する措置が明示されていた。しかし実際には、アテナイは自らが禁止を謳った駐屯軍やアルコン（役人）の設置を、忠誠を守り続けていた同盟国や非海上同盟国に対しておこない、シュンタクシス（貢納金）の徴収も課した。その結果、設立当初に掲げられた理想はやがて忘れ去られ、再び前世紀型の帝国が出現するに至った。すなわち、同盟市戦争の勃発とそれによる海上同盟の瓦解とは、アテナイの帝国主義的行動を原因とした、当然の帰結とされているのである²⁾。

しかし、1980年代初頭、J.L. Cargillは碑文を中心とした史料の洗い直しをおこない、第二次海上同盟の「第二次帝国」化説を否定するに至った³⁾。Cargillによれば、駐屯軍やアルコンを派遣することは同盟国内において一般に認識されていた政策であり、アテナイがそれらを拒否する加盟国に対して押し付けたものではない、という⁴⁾。また彼は、海上同盟に対する加盟国の金銭的な貢納は高額なものではなく、加盟国の代表と協議した上で課せられていると考えている⁵⁾。要するに、Cargillは、アテナイが設立当初に掲げた理念に抵触したとする主張は支持しがたいものであり、アテナイの同盟国に対する不当な対応を示す議論は的外れなものであるとしているのである。

しかしながら、これらの研究では、いずれもアテナイとその同盟国という関係を基本軸として据えた上で議論がなされている。前5世紀末以来のギリシア世界を振り返ると、ペロポネソス戦争はペルシアの資金援助を受けたスパルタが勝利した。コリントス戦争は、ペルシアが小アジアからスパルタ軍を撤退させる外交手段として、ギリシア本土における反スパルタ勢力を支援したことにより勃発し、最終的には、スパルタがペルシアに譲歩することによって終結した。海上同盟も大王の和約を意識した上で結成されており、同盟市戦争においてもペルシアの介入を見ることができる。マケドニアの勃興においても、イソクラテスに見られるように、マケドニア王フィリッポス2世を対ペルシア戦争の指揮官として受け入れる風潮も存在した⁶⁾。このように、前4世紀のギリシア世界は、ペルシアの存在なくしては語ることができない。本稿の目的は、海上同盟を「第二次帝国」であったと解釈すべきか否かを検討した上で、海上同盟をアテナイ―ペルシア関係という基本軸に照らして見直すことにより、海上同盟自体の意義について再考察することにある。

第1章 大王の和約と海上同盟の成立

コリントス戦争は、ペルシア大王の名で下された和約を、ギリシア諸市が承認するという形で終結した。後に大王の和約と呼ばれることとなるこの条約の内容は、クセノフォンの記述に従えば以下の3点に要約できる⁷⁾。

- ① 小アジアのギリシア人諸市および島嶼部のうち、クラゾメナイとキュプロスはペルシア大王に帰属する。
- ② その他のギリシア人諸市は自治を認められる。ただし、レムノス、インブロス、スキュロス⁸⁾は例外であり、これらの3島はアテナイに帰属する⁸⁾。
- ③ 条約を拒否する者たちに対する協同制裁。

この条約は、ペルシア大王によって課されるという形を採用したこと、期限の有効性の述べられていない、すなわち名目上は無期限有効であったこと、交戦国以外の諸市も条約に署名するという点で前世紀までは例を見ない、全く新しい形式の和平条約であった。そして、その後も前375年、前372/1年、前371/0年、前362年と更新されていくこととなり、前4世紀ギリシアの国際政治史における一つの基本線を定めることとなったのである。

それでは、大王の和約が定めた基本線とは、いったいどのようなものだったのであろうか。

大王の和約はペルシア大王がギリシア諸市に対して課した条約であるために、ペルシア大王の観点から解析することが必要となってくる。まず大王の和約における第1の条項、すなわち小アジアのギリシア人諸市のペルシア大王に対する帰属についてである。前449年、ニキアスの和約がアテナイとペルシアとの間で結ばれたことによってペルシア戦争が終結して以来、ペルシアは小アジア沿岸のギリシア人諸市に対する介入を控えてきたが、前413年、アテナイ艦隊がシチリア遠征に失敗し制海権を喪失すると、状況は変化した。

ダレイオス王は、リュディアのサトラペスであったティッサフェルネスを介してスパルタと協定を締結し、小アジアに対するペルシアの領有権を主張し、スパルタを資金援助することによって小アジアからアテナイ勢力を排斥することに努めた。このことは結果的に、小アジアに対するスパルタの介入を招くことになり、スパルタとペルシアとの間に取り決められた3度に渡る協定も死文に帰すこととなったのである⁹⁾。しかし、コリントス戦争中の前392年、サルディスにおける和平会談ではスパルタ自身から歩み寄りが見られ、最終的には前386年の大王の和約において、小アジアのペルシア大王に対する帰属を、全ギリシア諸市に対して認めさせることに成功したのであった。

そして、第2の条項、ギリシア人諸市の自治を認めることにより、対ペルシア的軍事同盟を未然に解消させることが可能となり、統一したギリシア勢力による小アジアに対する実質的な侵略を回避することができるようになったのである。その手段は、スパルタを条約の擁護者として認めることによって¹⁰⁾、ギリシア世界における間接的裁定者の地位を獲得しギリ

シア世界を細分化することであった¹¹⁾。

第3の条項においては、和平案を拒否する者たちに対する協同制裁を定めることにより、この和平がペルシア大王の勢力下に置かれているということをギリシア諸市に対して示している。すなわち、大王の和約によって、ペルシア大王はペルシア戦争以後の対ギリシア政策、すなわち小アジア沿岸のギリシア人諸市を帝国の支配下に収め、統一したギリシア勢力によるペルシアに対する実質的侵略を阻止するという目標に対し、一応の成功を見ることができたのであった。

他方、条約の擁護者の地位を獲得したスパルタは、マンティネイア攻略、フレイウス干渉、オリュントス遠征、テバイの不法占拠という形で積極的な対外侵略政策を展開する。この間のスパルタは、大王の和約の擁護者という地位にありながらも、自らがその自治条項を無視、あるいは対スパルタ的軍事同盟を解体する根拠として自己解釈を行い、大王の和約をスパルタ帝国主義拡大のためのツールとして利用したのである¹²⁾。

しかしながら、大王の和約はペルシアとギリシアとではなく、ペルシアとスパルタとの相互利益の上に成立した条約であった。そのために、スパルタがギリシア世界内において大王の和約に抵触するようなことがあったとしても、ペルシア大王が定めた基本線に触れない限りにおいては、スパルタが和約の擁護者としての地位を喪失することはなかったのである。ところが、前380年末になると状況は変化した。スパルタは、ペルシア大王に対して反旗を翻していたペルシア人総督グロスと同盟を締結したのである¹³⁾。間もなくグロスが暗殺されたため同盟は短命に終わり、スパルタがペルシアに対する実質的な脅威へと成長することはなかったが、スパルタ—グロス間の同盟を耳にしたペルシア大王が、スパルタに対する態度を硬化させたことは想像に難くない¹⁴⁾。この段階において、スパルタは和約の擁護者の地位を失ったのである¹⁵⁾。他方、スパルタがペルシアの後ろ盾を失ったことにより、アテナイは前378年、キオス、リュザンティオンらと個別に結んでいた同盟を一つに纏め上げ¹⁶⁾、さらにはテバイをも同盟に引き入れ¹⁷⁾、翌年それを海上同盟へと発展させると、大王の和約が破棄されたものとして、スパルタとの開戦を宣言したのであった¹⁸⁾。

この新しく結成された海上同盟の規約は、発案者名からアリストテレス決議とも呼ばれている。その内容は、1851年にアテナイのアゴラから出土した大理石碑文¹⁹⁾やディオドロスの記述から明らかとなっており、要点をまとめると以下の通りとなる。

- ① 自由と自治の保障²⁰⁾。
- ② 同盟諸市に対する国制選択権承認。
- ③ アテナイによる駐屯軍、アルコン派遣と貢納徴収の禁止。
- ④ 同盟諸市領土におけるアテナイ人の土地財産所有権の放棄および罰則規定²¹⁾。

これらの条項が示している意味は如何なるものなのか。先の大王の和約においては、自治の保障が定められていたにもかかわらず、具体性に乏しかった。そのために、スパルタは自治条項を、対スパルタ的同盟を解体する手段として自己解釈し、最終的にはペルシアにとっ

ての脅威となる潜在的可能性をも見せたのであった。アテナイが海上同盟規約において宣言している内容は、スパルタの行動に対するアンチテーゼであるとともに、自治定義の不在、自治保証の手段および適用範囲が未定であるという課題に対して、アテナイが示した指針であった。すなわち、アテナイは自らが和約の擁護者として適任であることをプロバガンダしているといえ、それゆえ海上同盟は、設立当初から大王の和約に大いに規制されたものであったとみなすことができよう。

第2章 海上同盟期におけるアテナイの対外政策

前377年に海上同盟が結成されると、アテナイ—スパルタ間では本格的に戦争が勃発した。この間、海上同盟にはヘスティアイアを除くエウボイア島諸市、エーゲ海島嶼部、小アジア沿岸を除く沿岸諸市が次々と加盟し、アテナイは先の二大戦で喪失した海上覇権を取り戻すことに成功した。

しかし、前357年にはビュザンティオン、キオス、ロドスらの主要同盟国による反乱によって、海上同盟は事実上、瓦解した。従来、描かれてきた崩壊へのシナリオは、海上同盟規約によって明文化された設立当初の理念が時の経過とともに忘却され、アテナイは前世紀のデロス同盟の轍を踏んだ、というものである。そして、設立当初の海上同盟から「第二次デロス同盟」への転換点として、以下の3点が挙げられる²²⁾。

1. 対スパルタ的軍事同盟としての意義が同盟から失われた。
2. アテナイはアンフィポリス、ケルソネソスに対する領有権を主張した。
3. アテナイはサモス島に対するクレールーキアを派遣した。

以下では、上記3点が果たして「第二次帝国」化へのメルクマールとして意味を持つか否かを検討しよう。

1. 対スパルタ的軍事同盟としての意義

海上同盟規約には、

ギリシア人たちが自由にして自治を有し平和のうちに過ごすこと、および各々がその領土を安全に所有することをラケダイモン人たちが許すように。(Tod, 123, ll. 7-12)

と明記されている。このことから、海上同盟結成当初、その目的の一つとして対スパルタ的軍事同盟としての色彩が強かったことが伺われる。しかし、前370年代後半よりテバイがボイオティア同盟再建の動きを急速化させ、プラタイア、テスピアイアなどの近隣諸市を覇権内へ取り込んでいくと、アテナイはテバイに対する不信感を強めていった²³⁾。スパルタ—テバイ間で勃発したレウクトラの戦いにテバイが勝利すると、アテナイはテバイに対する嫌

悪感を露にするようになる²⁴⁾。前 370 年、アテナイはテバイによる侵攻を受けていたスパルタに対し援軍を派遣すると、翌年には正式にアテナイ—スパルタ間同盟が締結された。さらに、前 367 年にスパルタの同盟者であったシラクサ僭主デュオニシオス 1 世と同盟を締結すると²⁵⁾、同年のうちにテバイを牽制するためにフェライ僭主アレクサンドロスとも同盟を締結している。レウクトラの戦い以降、ギリシア本土の力関係は大きく変動し、すでにかつての国力を失ったスパルタよりも、国境を接するテバイのほうがアテナイにとっては脅威として感じられたに違いない。しかし、それは同時に、海上同盟の中にある対スパルタ的軍事同盟としての要素が消失したことを意味した。

ところで、同盟に加わったエーゲ海島嶼部は、アテナイが親スパルタ的政策へと転換したことに對して、どのような反応を示したのか。アテナイの政策転換に對しての島嶼部の不安を示す史料として、ミュティレネ人顕彰決議碑文がしばしば用いられている²⁶⁾。この碑文は前 367 年初頭のものであり、

ミュティレネ人使節に對して、アテナイ人はギリシア人の自由のために戦ったのであると返答すべきこと。(Tod, 131, ll. 40–43)

と記されている。海上同盟は、ギリシア人の自由と自治をスパルタから勝ち取るために結成されたものである。ところが、アテナイは親スパルタ的政策へと転換してしまったために、ミュティレネの市民たちはアテナイに對し、戦争自体の目的を問い質した。「ギリシア人の自由のため」という具体性を欠いた弁明は、アテナイが置かれている苦しい立場を示していると解釈されている。しかし、アテナイがスパルタに援軍を派遣した前 370 年からこの決議が出された前 367 年までは、3 年間もの時間の開きがあり、アテナイの政策転換に對して直ちに島嶼部が態度を硬化させたとは考えられない。

F. H. Marshall は、アテナイ—スパルタ間同盟が成立した時点で、海上同盟自体のレゾン・デートルが失われたとしている²⁷⁾。しかし、エーゲ海島嶼部にとって第一の関心事は、決してギリシア本土における覇権争いの行方ではなく、エーゲ海における海賊行為を追放し、安全な航行が保障されることであった。そして、エーゲ海における安全な航行は、海上警察としての機能を果たしていたアテナイの国力と比例した関係にある²⁸⁾。アテナイは、自らの国力を維持するために、テバイの脅威によって親スパルタ的政策へと転換をおこなった。このことは、島嶼部を海賊の略奪行為から保護すること、すなわち「ギリシア人の自由」へとつながる。この政策転換の段階では、海上同盟自体の存在意義が失われたとはいえないのである。

2. アンフィポリス・ケルソネソスに對する領有権の主張

アテナイが海上同盟期に積極的な對外戦争を展開した地域は、アンフィポリスとケルソネソスの二方面である。この二地域は、経済的に非常に重要な地域であった。カルキディケー

半島の付け根に位置するアンフィポリスは、近隣地域の豊かな森林資源、パンガイオン山から産出される金銀など、天然資源を運び出す輸出港であり、ここから運び出されたものは造船、貨幣鑄造にとって必要不可欠であった。他方、ケルソネソスはプロポンティス海の入り口に位置しており、黒海沿岸地域とアテナイとを結ぶ糧道にとって、交通の要衝であった。前4世紀当時、アテナイはギリシア世界最大の穀物輸入国であり、その大半を黒海沿岸地域から輸入していたのである²⁹⁾。さらに、この両地域に挟まれたトラキア地方は、古代ギリシア経済にとっては必要不可欠とも言える奴隷の供給地でもあった³⁰⁾。アテナイのアンフィポリス、ケルソネソス両地域に対する関心は非常に高く、はやくも前6世紀には介入を始めていたが、前404年ペロポネソス戦争に敗北した結果、アテナイはいったん、すべての海外領土を放棄しなければならなかった³¹⁾。

アンフィポリス回復の運動については、前4世紀の弁論家アイスキネスの弁論2番『使節団の背任について』に大幅に依拠しなければならない。アイスキネスによれば、レウクトラの戦いが終結した後、アテナイにおいて開催された和平会議の場に、マケドニア王アミュンタス3世の使者が出席し、アテナイのアンフィポリス領有を支援すると約束した³²⁾。テバイによるペロポネソス侵攻が一段落した前369年夏、アテナイはイフィクラテスを将軍として選任すると、「包囲作戦というよりは現地視察のために」、彼をアンフィポリスへ派遣した³³⁾。以後、前357年にフィリッポスがアンフィポリス領有に成功するまでの約10年間、アテナイは毎年のように艦隊を派遣したが、アミュンタス3世死後のマケドニア王、カルキディケー連邦再建に向けて動き出していたオリュントス、そしてアンフィポリス自体の抵抗にあり、泥沼化した領有戦争に巻き込まれることとなる³⁴⁾。

他方、ペルシアのサトラペス、アリオバルザネスがペルシア大王に対して反乱を起こしたことを契機として、前360年代後半からアテナイのケルソネソス回復の動きが活発化した³⁵⁾。しかし、トラキアにおいてオドリュサイ王国を統一したコテュスが、ケルソネソスに対して領土拡大をおこない、アテナイと利益衝突を起こしたことにより、ここにおいても領有戦争は長期化した。前360年までにコテュスが死去し、一時的にアテナイはケルソネソスの一部を領有することに成功したものの、前340年代に入りフィリッポスがトラキアを征服した後、アテナイはケルソネソスの領有をめぐるフィリッポスと対立した³⁶⁾。

アンフィポリス、ケルソネソスに対してアテナイが進出したことは、海上同盟にとってどのような意味を持っていたのであろうか。確かにアテナイが領有戦争に乗り出したことは、同盟諸市に対して多少の動揺を与えたかもしれない³⁷⁾。しかし、アンフィポリスとケルソネソスは共に造船用木材と小麦という、アテナイの国力維持にとっては必要不可欠であった物資を入手するための要衝であり、単なるアテナイの利己的な拡張政策の一環とみなすわけにはいかない。海上警察、和約の擁護者を自らの役割と考えていたアテナイが、国力を維持する上で、この両地域を欠くことはできなかったのである。アテナイは決して政策転換をおこなったわけではない。一貫した政策のもと、状況が領有戦争を許すように変化したのである。

3. サモス島に対するクレールーキア派遣

前366年、ペルシアのサトラペス、アリオバルザネスは、ペルシア大王との関係が緊張状態に入ると、スパルタとアテナイとに救援要請をおこなった。それに応えて、アテナイはティモテオスを派遣することとなった。現地に到着した彼は、アリオバルザネスの敵がペルシア大王であることを知ると、ペルシア大王との関係を悪化させることを恐れて、ペルシアの駐屯軍が置かれていたサモス島へと向かうこととなった。ティモテオスは10ヶ月間におよぶ包囲をおこなった後、ペルシアの駐屯軍を追放すると、そこにアテナイのクレールーキアを派遣した³⁸⁾。このクレールーキア派遣に対する学界の評価は二分している。海上同盟を前世紀型帝国として見なしている研究者たちは、クレールーキアが海上同盟規約に直接的には抵触していないものの、その精神を踏みにじり、このことにより海上同盟諸市に前世紀の悪夢を呼び起こさせ同盟諸市の離反、同盟市戦争という結果に結びついたと主張している³⁹⁾。

これに対し、旧説を批判している J. L. Cargill は、サモス島がエジプトからアテナイへの糧道の中継点、対ペルシアの前線基地として機能しており、アテナイは同盟規約の枠内において同盟諸市を保護していたと主張している⁴⁰⁾。また R. Sealey は、クレールーキアが防衛の手段として当地の住民たちに歓迎されていたと主張している⁴¹⁾。さらに彼は、サモス島に対するクレールーキアがアテナイの余剰人口を大々的に移転させたものではなく、前4世紀初期のスパルタ覇権期にアテナイへと亡命していたサモス島の旧住民およびその子孫たちがアテナイ市民権を取得した後に、祖国へと帰還する機会を得たものである、という画期的な新説を提唱している⁴²⁾。しかし、この説は残念ながら史料的な根拠に乏しく、はっきりとしたことはいえない。

ここで考慮に入れなければならないことは、サモス島は海上同盟の非同盟国であり、かつ大王の和約におけるペルシア大王の支配領域外であったという事実である。またクレールーキア派遣の前年、ペルシアのスサにおいて開催された会議では、ペルシア大王はテバイ支援を表明している。すなわち、アテナイのサモス島に対するクレールーキア派遣は、海上同盟規約に抵触しない形で、エーゲ海東部地域からペルシアの影響力を取り除いたと同時に、ペルシア大王に対する抗議というプロパガンダの要素をも含んだ、巧みな作戦であるといえる。

海上同盟はその設立当初、自らの再帝国化を禁止するような条項を掲げていた。しかし、設立から時を経るにつれ、同盟規約において自ら禁止を謳っていたフォロスの課税が、シュンタクシスと名を変えて登場した。駐屯軍やアルコンも、同盟諸市を保護するためという大義は存在したかもしれないが、各地に派遣されたことは否めない事実である⁴³⁾。これらを考えれば、海上同盟は設立当初に比すると帝国主義的な様相を強めたといわざるを得ない。しかしながら、上段で検討したように、第二次海上同盟が悪名高いデロス同盟型帝国へと転換した画期として考えられている諸事実は、いずれもが海上同盟＝「第二次帝国」を前提とした逆照射的見解によるものである。そもそも海上同盟は、ペルシア大王が課した大王の和約に大きく規制されたものとして結成された。それゆえに、第二次海上同盟＝「第二次帝国」

という図式により海上同盟の意義を考察することは、あまりにも単純過ぎるといわなければならない。アテナイとペルシアとの関係を基本軸として見直さなければ、海上同盟のギリシア史における意義は見えてこないのである。

第3章 海上同盟期におけるアテナイ — ペルシア関係

前4世紀のペルシア帝国は、アルタクセルクセス2世（在位前405–359年）とアルタクセルクセス3世（在位前359–338年）の治世によってその大半を占められる。アルタクセルクセス2世の治世初期は、国内的には小キュロスの反乱を鎮圧して王位を安定したものとした一方、国外的には前399年にエジプトがペルシア支配から離脱している。前4世紀ペルシアの対外政策における核は、このエジプトを再びペルシアの支配下に置くことであった⁴⁴⁾。そして、このエジプト回復運動が対ギリシア政策に与えた影響は、以下の二点に要約できる。

- ① エジプト喪失の損害を補填するために、確固たる小アジア支配を築く。そのためには、小アジア諸市がペルシア大王に帰属する旨をギリシア人たちに認めさせると同時に、ギリシア勢力による小アジア侵略の可能性を断ち切らなければならない。
- ② エジプト遠征に必要となるギリシア人傭兵を確保する。当時、小キュロスの反乱における一万人の傭兵部隊や、コリントス戦争中にペルシア艦隊を指揮したアテナイ人コノンの活躍により、ペルシア国内におけるギリシア人傭兵の評価は高くなっていた。ギリシア人傭兵を確保するためには、ギリシア世界において傭兵が余る状態、すなわちギリシア世界における和平を確立しなければならない。

ペルシア大王はこれらの動機により、前386年、ギリシア諸市に対し大王の和約を課すこととなった。

ペルシア大王はこの段階で、エジプトの離脱以外にもう一つの外患を抱えていた。前391/0年、キュプロス島サラミスの王であったエウアゴラスが、全島の支配権とペルシア支配からの離脱を望んで、ペルシア大王に対する反乱を起こしたのである⁴⁵⁾。この反乱は10年間継続したが、実質的な戦争は、大王の和約締結後の約2年間に終結している⁴⁶⁾。そして、同じく締結後間もない前386年には、第一回目のエジプト遠征が実行されている。大王の和約締結後にペルシアがこれらの2つの対外戦争に乗り出したことは、キュプロスおよびエジプト問題に取り組むための前提として、ギリシア問題が存在していたことを示している⁴⁷⁾。

しかし、前360年代に入ると、小アジア各地でサトラペスによる反乱が相次ぎ、ペルシア帝国は内憂の時代を迎えることとなる。前369年前後、キリキアのサトラペスであり、エジプト遠征の指揮官という大役を任されていたダタメスは、その優秀さゆえに宮廷内の陰謀にあい、自ら反乱を起こすことになる⁴⁸⁾。また前366年、ダスキュレイオンのサトラペスであったアリオバルザネスは、反乱を起こすとアテナイ・スパルタに救援要請をおこない、す

でに反乱を起こしていたダタメスと合流する⁴⁹⁾。

ダタメスとアリオバルザネスの反乱の意図には、ペルシア大王による専制君主体制に対する反発も込められていたと考えられる。このようなペルシア大王に対する種々の不満が、前362/1年に大サトラペス反乱という形で一気に顕在化することとなった⁵⁰⁾。この大反乱を指揮したのはオロンテスという人物であった。彼はアルタクセルクセス2世の娘婿にあたり、王位篡奪をも計画していた可能性が高い⁵¹⁾。すでに反乱を起こしていたダタメスおよびアリオバルザネスは自らの地位をより強固なものとするために、この反乱に同調した。さらには、エジプト王であったタコスもこの反乱を支持し、自ら小アジアに遠征したことによって、反乱は各地に飛び火し、小アジア全体は混沌に陥ることとなる。反乱の結末はエジプトで革命が起きたことによりタコスが失脚し、彼の後ろ盾を失うと、成功の見込みが低いと判断したオロンテスはペルシア大王に投降し、呆気なく幕を閉じることとなった⁵²⁾。

この反乱終結直後の前359/8年、アルタクセルクセス2世が死去すると、三男であったオコスがアルタクセルクセス3世として即位した⁵³⁾。彼は即位以前から二人の兄の謀殺にみられるように、王位継承権の有資格者を追放し、自らの王位を安定したものとしていった⁵⁴⁾。前357/6年頃には小アジアにおいて失墜した大王の権威を復活させるとともに、王位継承権の有資格者による、王位に対する武力挑戦の潜在性を殺ぐために、「傭兵命令」なるものを発令し、沿岸地域のサトラペスたちに私用の傭兵部隊の解散を命じた⁵⁵⁾。前343年にはエジプト回復に成功したものの、それ以降ペルシアの国力は衰退の一途を辿り、前330年、アカイメネス朝ペルシアは2世紀余りにもおよぶその歴史に幕を下ろすことになる⁵⁶⁾。

以上のように、アルタクセルクセス2世の治世前半は、エジプト回復運動、エウアゴラスの反乱鎮圧、コリントス戦争の調停と対外政策に奔走していた。しかし、前360年代に入ると、相次ぐサトラペスの反乱に忙殺されることとなったのである。確かに、反乱に参加したサトラペスたちは、各々が自身の目的を持っており、ペルシア大王の専制君主体制を打倒すること以外に何らかの共通した目的を見つけ出すことは困難である。しかし、広大なペルシア帝国が抱えていた矛盾点が露呈し始めていたことは確かである。ディオドロスによれば、この時期、ペルシア大王の歳入は半減し、十分に戦争をおこなえなかったと伝えている⁵⁷⁾。半減とは些か誇張し過ぎにしても、国内問題の処理が最優先課題とされ、その結果、対外政策は国力が回復する前350年代末まで控えられるようになったというのが、納得のいく解釈である。

さて、大王の和約から同盟市戦争勃発までの期間（前386-357年）、ペルシアがギリシア世界に介入した機会は以下の4回である。これらの機会検討を通じて、ペルシアのギリシアに対する態度における一貫性を探してみることにしよう。

① 大王の和約

エジプトを喪失したペルシア大王は、小アジア支配の確立とギリシア人傭兵の確保のために、ギリシア諸市に大王の和約を課した。このことにより、大王は小アジア支配を明文化し、

ギリシアに休戦をもたらすことに成功した。スパルタが和約の擁護者の地位に就任しているので、この段階でのペルシア大王の態度は親スパルタ的である。

② 375年の和約

ペルシア大王は、エジプト遠征に必要なギリシア人傭兵を確保するために自らがイニシアティブを執り、ギリシア諸市に和平を要求した。和平成立の翌年、エジプト遠征が実行されている⁵⁸⁾。海上同盟の存在が公認されているので、この段階でのペルシア大王の態度は親アテナイ的である。

③ アビュドスのフィリスコス派遣

前368年春、アビュドスのフィリスコスがペルシアからギリシアに派遣された。彼の任務はデルフォイにて和平会議を主宰することであったが、この会議は失敗に終ることとなる⁵⁹⁾。フィリスコスは会議において反テバイ的立場をとっており、さらに帰国直前にはスパルタに2000人の傭兵を渡している。

④ スサにおける和平会議

前367年、テバイとその同盟国がペロピダスらを大使としてペルシアに派遣すると、アテナイ・スパルタもその動きに同調して、スサにおいて和平会議が開催された⁶⁰⁾。ペルシア大王はこの会議において親テバイ的態度を表明する⁶¹⁾。翌年、大使らが各国へ帰国すると、テバイはこの大王の勅書に署名するよう和平会議を開催したが、諸市の反対により結局この案は実行に移されることはなかった⁶²⁾。

しかし、前364年にはペルシアの資金援助を受けて造船されたテバイ艦隊がエーゲ海島嶼部を訪問すると、ビュザンティオンを海上同盟から離脱させることに成功した⁶³⁾。前362年には、このビュザンティオンの艦隊がアテナイの小麦輸送船を拿捕する事件が起きている⁶⁴⁾。テバイ覇権はその後急速に失墜することとなるが、一時的とはいえ、このペルシアによる親テバイ的政策転換は、海上同盟の存在自体をも脅かしかねないものであった。

以上、大王の和約から同盟市戦争勃発直前まで、ペルシア大王がギリシア世界に直接介入した機会を見てきた。この間、ペルシア大王は特定の一都市を支援することはなかった。また、ギリシア世界における力関係の動向に、即座に対応することもなかった。特にスサの会議における親テバイ的政策転換の表明は、テバイ自らの申し出を聞き入れるという受動的なものであった。ペルシア大王は、大王の和約によって定められた基本線に触れられない限りは、ギリシア世界内の覇権争いを関心の外においていたのである。

最後に、海上同盟を事実上の瓦解へと導いた同盟市戦争について考察する。同盟市戦争に対するペルシアの関与は、カリアのサトラペス、マウソロスとペルシア大王という二側面からの考察が必要となってくる。

1. マウソロス

デモステネス弁論『ロドス人の平和のために』(XV)において、彼は次のように主張して

いる。

しかし、私たちにとっては、この事件（同盟市戦争）を促し煽動した第一人者であるマウソロスが、いまやロドスの民の友人であると称して、彼らから自由を奪ったことは明らかなことなのである。（Dem., XV, 3-4）

この弁論は、ロドス島で勃発した寡頭派革命により亡命者となったかつての民主派指導者を擁護するため、前353-前352年初頭にかけおこなわれたものであると考えられる⁶⁵⁾。デモステネスは、同盟市戦争が民主派指導者たちの主導で行われたのではないかという、非難の矛先を、他の人物にそらさなければならなかった。そのために、実際のマウソロスによる戦争関与を、誇張しているのではないかという疑問が残る。しかし、ディオドロスも、その史書の中で次のように述べている。

彼ら（アテナイ將軍カレスおよびカブリアス）がキオスに到着するとビュザンティオン・ロドス・コスに加えてカリア地方のサトラペス、マウソロスからの同盟軍がすでにキオスに到着していることが分かった。（Diod., XVI, 7, 3）

このことから、少なくともマウソロスが同盟市戦争に関与したことは確かなことのようにある。マウソロスによる同盟市戦争への関与の度合いを測るためには、彼を輩出したヘカトムノス朝およびその支配地域であるカリアの特殊性を考慮に入れなければならない。

カリアは、アナトリア半島南西部に位置する山岳地帯である。前6世紀初頭にクロイソス王のリュディア王国に併呑されたが、前546年にはキュロス2世の命を受けたハルパゴスに征服され、リュディアの一部としてアカイメネス朝の支配下に入ることとなる。当時、カリアは内陸の河川流域に土着のカリア人が、後背地の乏しい沿岸部には、ハリカルナッソス近隣にはレゲス人と呼ばれる土着民族の小集落と、ギリシア人の植民都市が点在していた⁶⁶⁾。カリアがペルシア帝国の一部となった後も、この構造に大きな変化は見られなかったと考えられる。

ヘカトムノス朝は二段階の手順を踏んで、カリアの支配者となっている。カリア人たちは政治的統一体を形成していないときにも、内陸に位置するミュラサに祀られている「カリアに坐すゼウス（ゼウス・カリオス）」を崇拝するという宗教的紐帯によって、統一のアイデンティティを持っていた⁶⁷⁾。まず、ヘカトムノス朝はミュラサをその勢力圏内に取り込むことによって、「カリアの王」と呼ばれる宗教的首長の地位を獲得したと思われる。次に、前392/1年頃、スパルタの小アジア遠征に対応するため、アルタクセルクセス2世は広大なサトラピーであったリュディアを、リュディア、イオニア、カリアへと三分割することを決定する。これと同時に、当時「カリアの王」であったヘカトムノスが平行移動する形で、ペルシア帝国のサトラペスへと任命されることになる。すなわち、ヘカトムノス家はペルシア帝国のサトラペスである以前に、カリア人の指導者であった。そのことを物語る事件とし

て、キュプロス島反乱当初、カリアのサトラペスとして反乱鎮圧のために艦隊を派遣したヘカトムノスは、やがてエジプト王アコリスとともに、敵方エウアゴラスと秘密裏に同盟を結んでいる⁶⁸⁾。このことは、ヘカトムノス家がアカイメネス朝の支配からある程度独立し、自由裁量に委ねられていたことを示唆している。

マウソロスの前377/6年頃、ヘカトムノスの跡を襲い、カリアの第2代サトラペスの地位に就き、同盟市戦争が終結して間もなくの前353/2年に死去した⁶⁹⁾。ディオドロスは、大反乱を起こした主要人物の一人としてマウソロスの名を挙げているが、彼がおこなった具体的な活動については触れていない⁷⁰⁾。従来、この反乱によってマウソロスは内陸地域に対する勢力拡大を画策していたと考えられてきた⁷¹⁾。しかし、サトラペスとしてカリアの支配権を保証されていたヘカトムノス朝にとって、ペルシア人同士の争いに関与してペルシア大王を攻撃することは余り意味を持っていなかった。マウソロスの反乱における活動は、大王への納税を控え、他の反乱者を経済的に援助するという、消極的なものに留まっていたであろう。また、マウソロスは反乱が勃発する以前に、沿岸部におけるレゲス人小集落を統合し、ギリシア人のポリスであるハリカルナッソスに吸収させると、内陸の宗教的中心地であるミュラサからハリカルナッソスへと遷都をおこなっている⁷²⁾。これらのことは、マウソロスの対外政策の対象が内陸のペルシア帝国領土よりもむしろ、エーゲ海東部地域のギリシア世界へと向けられていたことを示唆している。

次に、マウソロスのエーゲ海東部地域に対する関心について考察する。エーゲ海島嶼部は、広範囲にわたりマウソロスの影響を受けているが、その中でも特にロドスは、ヘカトムノス朝支配が色濃く見られる⁷³⁾。

ロドスはカリアの対岸に位置し、カリア防衛上の戦略的要衝であるとともに、アテナイーエジプト間の糧道の中継点でもあった。ロドスは前377年、海上同盟結成当初からの加盟国である。アテナイとの緊密な関係が築かれていたということは、この段階では民主派政府であったと考えられる。前360年代後半には、テバイ艦隊による訪問を受けたが、これにより海上同盟から脱退することはなかった。前350年代に入るとマウソロスの影響が見られるようになる。

彼ら（ロドス人）は、ギリシア人でありよき友人であるあなたたちとは同盟を結ぼうとはせず、バルバロイと奴隷たちに奴隷とされており、彼らをアクロポリスに引き入れている。（Dem., XV, 15）

しかし、あなたたちはミュティレネの民主制が打倒されたことに黙し、無関心であり、ロドスの民主制が打倒されたことに大いに沈黙しているのに、ロドス人は敵であると言うのだ。（[Dem.], XIII, 8）⁷⁴⁾

またロドスでも同様である。民衆煽動家は民衆に公務の手当てを支給し、三段槳船長に対して（船の機装、修理などの）負債の返済を停止した。船長たちは（彼らに対して契約者が）起こし

た訴訟に弱りはてて、やむなく（他の上流層の者と）結束して民主制を覆したのである。（Arist., *Pol.*, V, 1304 b, 28-31）⁷⁵⁾

これらの史料をまとめよう。マウソロス、同盟市戦争勃発以前にロドスに駐屯軍を設置した。同盟市戦争が終結すると、民主派が富裕者層を圧迫したことが原因となり、前353年以前に寡頭派革命が勃発した。マウソロスがこの革命を先導したことを示す直接的な史料は存在しない。しかし、同じく寡頭派的志向を持っていたマウソロスが、革命を支持したことは想像に難くない。この革命により、マウソロスはロドスをアテナイの影響から完全に切り離し、自己の影響下に置くことに成功したのである。

以上のように、マウソロスはエーゲ海東部地域における商業圏確立に熱心であった。ペルシア帝国中央の政策とは比較的独立した位置にあったマウソロスであったからこそ、このような大王の和約を無視した大胆な政策推進が可能であったのである。他方、エーゲ海島嶼部もいまや、ペルシア大王の好意を失いかけたアテナイよりも、マウソロスの庇護下に入ることをよしとしたのである。すなわち、同盟市戦争の勃発は、マウソロスと島嶼部の利益が一致した、アテナイ排斥運動という側面も持ち合わせていたのである。

2. ペルシア大王

同盟市戦争勃発時に、ペルシア大王がマウソロスに何らかの指示を出したとする史料は残っていない。しかし、エーゲ海東部地域からアテナイの影響力を排除することは、小アジアに対する実質的な侵略を恐れていたペルシア大王の意向と対立することはなかった。

ペルシア大王が同盟市戦争に積極的に関与するのは、戦争勃発後のことである。当時ペルシア大王に対し反乱を起こしていたアルタバゾスは、エーゲ海東部に駐留していたアテナイの将軍カレスを招聘することとなった。

軍資金不足に喘いでいたカレスはこの申し出を快諾し、ヘレスポントス地域へ赴くと、ペルシア大王軍を撃破した⁷⁶⁾。その後の様子をディオドロスは次のように伝えている。

アテナイ人たちは当初カレスの行動を容認していたが、ペルシア大王が使節を派遣し彼を非難すると、逆の立場をとることとなった。（Diod., XVI, 22, 2）

ペルシア大王の要請を受けると、アテナイは反乱諸市と和平を締結し、同盟市戦争は終結することとなった。このペルシア大王による非難は、どのような意味を持つのであろうか。

海上同盟は、大王の和約によって定められた基本線に一致するような形で結成された。しかし、アテナイ将軍であるカレスが小アジアにおいて大王軍を撃破したことは、明らかに大王の和約を逸脱した行為であった。先に和約の擁護者としての地位を獲得したスパルタも、グロスの反乱に加担しペルシア大王の信任を失ったことが原因で、ギリシア世界における覇権喪失へとつながることとなった。同様にアテナイも、アルタバゾスの反乱に加担すること

によって、和約の擁護者としての意味を完全に失うこととなる。ペルシア大王の信任を失ったアテナイは、ギリシア世界を統治する実力と根拠を持ち合わせることができなくなっていたのである。

お わ り に

同盟市戦争が終結すると、アテナイは反乱諸市と和平を結び、彼らが海上同盟から正式に脱退することを許可した。また、同盟市戦争中、マケドニア王フィリッポスは北エーゲ海沿岸地域の諸市を自己の覇権内へと吸収していくこととなる⁷⁷⁾。戦争終結後、海上同盟に残った主要都市はわずかにレスボス島の数都市のみであり、海上同盟は事実上その活動を停止させることとなる⁷⁸⁾。前4世紀ギリシア世界を四半世紀にわたり先導してきた海上同盟は、ギリシア史においてどのような意味を持つのであろうか。本稿での検討をふまえるならば、次のように述べることができよう。

従来、海上同盟はアテナイと同盟国との関係を基本軸として論じられてきた。しかし、アテナイが帝国主義的様相を強めたということによってのみ、海上同盟全体を論じることは不可能である。アテナイは海上同盟を大王の和約の枠組みに当てはまるように設立し、ペルシア大王の利益に反しないことを条件に、ギリシア世界に君臨することができた。一時的にはテバイがペルシア大王の好意獲得に成功するものの、アテナイはペルシア大王と直接的に対立することはなかった。だが、同盟市戦争中にアテナイ将軍カレスがとった行動は、ペルシア大王の定めた基本線を破壊するものであった。ペルシア大王によって同盟市戦争が終結させられると、戦争で疲弊し第一国の地位から退いたアテナイには、マケドニアの南下を未然に阻止するほどの余力は残ってはいなかった⁷⁹⁾。

アテナイがペルシアとの関係を断絶した後、ペルシア帝国がギリシア世界に介入することはなくなった。そのことはすなわち、ペルシア帝国によって規定されていた前4世紀のギリシア世界が終焉し、マケドニアに規定されるヘレニズム期への移行を意味したのである。

注

- 1) 海上同盟に焦点を当てた研究は、管見の限りでは以下の通りである。

F. H. Marshall, *The Second Athenian Confederacy*, Cambridge, 1905; H. G. Robertson, "The Administration of Justice in the Second Athenian Confederacy", *Classical Philology* 23, 1928, pp. 30-33; V. Ehrenberg, "Zum zweiten Attischen Bund", *Hermes* 64, 1929, pp. 322-338; 衣笠茂「第二アテナイ海上同盟の同盟総会」『史林』42-1, 1953年, pp. 34-50; 衣笠茂「第二アテナイ海上同盟について」『岡山史学』41, 1956年, pp. 1-15; G. L. Cawkwell, "The Foundation of the Second Athenian Confederacy", *Classical Quarterly*, n. s. 23, 1973, pp. 47-60; G. T. Griffith, "Athens in the Fourth Century", in P. D. A. Garnsey and C. R. Whittaker (eds.), *Imperialism in the Ancient World*, Cambridge, 1978, pp. 127-144; G. L. Cawkwell, "Notes on the Failure of the Second Athenian Confederacy", *Journal of Hellenic Studies* 101, 1981, pp.

- 40-55; J. L. Cargill, *The Second Athenian League: Empire or Free Alliance?*, Berkley and Los Angeles, 1981; 森谷公俊「前4世紀アテネの帝国化について——第二次海上同盟を中心に」『西洋史学』129, 1983年, pp. 39-53; 森谷公俊「第二次海上同盟期アテネの政治と外交(前377-355)」『史学雑誌』92-11, 1983年, pp. 1-40; 池田忠生「王の平和と第二次アテナイ海上同盟の成立」『史学研究』179, 1988年, pp. 72-91。なお、筆者未見であるが重要な研究とされるものとして、S. Accame, *La Lega ateniese del secolo IVa. c.*, Roma, 1941がある。
- 2) 古典古代世界における帝国主義の定義については、M. I. Finley, "The Fifth-Century Athenian Empire: A Balance-Sheet", in P. D. A. Garnsey and C. R. Whittaker (eds.), *op. cit.*, pp. 103-126.
- 3) J. L. Cargill, *op. cit.*, p. 188. Cargillの研究を紹介する邦語文献としては、小田洋「第二次海上同盟時代のアテナイの同盟関係——J. Cargillの新著を読んで」『鹿大史学』29, 1982年, pp. 13-37。小田は、Cargillのように再帝国化を完全に否定する議論は受容することはできないという、消極的見解を示している。
- 4) J. L. Cargill, *op. cit.*, p. 193.
- 5) *ibid.*, p. 195.
- 6) G. Mathieu, *Les idées politiques d'Isocrate*, Paris, 1925, pp. 153-174.
- 7) Xen., *Hell.*, V, 1, 31. ただし、この箇所は、前367年にサルディスにおいて読み上げられた詔勅を記述しているのであって、厳密な意味で前386年にスパルタにおいて締結された大王の和約の文面を伝えているとはいえない。
- 8) 自治(*αὐτονομία*)という語の定義については、長らくギリシア史における議論的となっていた。当初、自由(*ἐλευθερία*)が対外的独立を意味することに対し、自治(*αὐτονομία*)は対内的主権を意味するという、二元的解釈論が支持されていた。しかし、E. J. Bickerman, "Autnomia: Sur un passage de Thucydide (I, 144, 2)", *Revue internationale des droits de l'antiquité* 3 ser. 5, 1958(筆者未見)。しかし、Bickermanの主張はM. Ostwaldの著書から読み取ることができる)はこの解釈に対する批判を行い、*ἐλευθερία*とは共同体が持つあらゆる国際関係に先立つ絶対的な性格をもった主権を意味することに対して、*αὐτονομία*とはより強力な外部勢力の庇護下において独立を維持することを意味するとしている。
- E. J. Bickermanの説を基本的には継承する形でM. Ostwald, *Autonomia: Its Genesis and Early History*, Chicago, 1982は、*αὐτονομία*とは弱小都市が強力な勢力に直面した際に自己の独立を擁護するためのものであり、アテナイに対するデロス同盟諸市の抵抗のうちに形成された概念であるとしている。
- これに対してR. Sealey, *Demosthenes and His Time*, Oxford, 1993, pp. 241-244は*αὐτονομία*が独立が完全体である共同体に対して、あるいはペルシア帝国の支配を受ける以前の小アジア諸市のように強国の支配が存在しない場合にも使用されると指摘している。彼によれば、*αὐτονομία*とは国際関係における規則ではなく意味論上の問題であり、直接的な状況変化や対比されるべき状況が存在して初めて意味を持つ言葉である。
- 9) ペロポネソス戦争中のスパルターペルシア間協定については、Thuc., VIII, 18; 37; 57. 小アジア遠征は前399年、ティブロン派遣(Xen., *Hell.*, III, 1, 4), デルキュリデス派遣(Xen., *Hell.*, III, 1, 8), 前396年、アゲシラオス派遣(Xen., *Hell.*, III, 4, 2-4; Xen., *Ages.*, 1, 7; Plut., *Ages.*, 6)の計3回行われた。
- 10) Xen., *Hell.*, V, 1, 36に「スパルタが擁護者となった」という語句が出てくるが、実際に大王の和約において*προστάτης*の条項が明記されていたかは不明である。
- 11) 例えば、衣笠茂「アンタルキダス条約(大王の和約)の成立」『西洋史学』15, 1952年, p. 39は、大王の和約によるギリシア世界の細分化を「アトム化」という語を用いて表現している。
- 12) C. D. Hamilton, *Sparta's Bitter Victories: Politics and Diplomacy in the Corinthian War*, Ithaca and London, 1979, p. 329.
- 13) Diod., XV, 9, 3-5.
- 14) Diod., XV, 18, 1.

- 15) 池田忠生『史学研究』179, p. 87 f.
- 16) キオスについては Tod, 119; ビュザンティオンについては Tod, 121; Diod., XV, 28, 1-4 を参照。
- 17) Diod., XV, 28, 5.
- 18) Diod., XV, 29, 7.
- 19) Tod, 123.
- 20) Diod., XV, 28, 4.
- 21) Diod., XV, 29, 8.
- 22) F. H. Marshall, *op. cit.*, p. 109; P. Cloché, *La politiques étrangère d'Athènes de 404 à 338 avant Jésus-Christ*, Paris, 1934, p. 157 f.; G. T. Griffith, *op. cit.*, p. 144; G. L. Cawkwell, *JHS* 101, p. 53 f.; 森谷公俊『西洋史学』129, p. 48; C. Schwenk, "Athens", in L. A. Tritle (ed.), *The Greek World in the Fourth Century; From the Fall of the Athenian Empire to the Successors of Alexander*, London and New York, 1997, p. 28.
- 23) Xen., *Hell.*, VI, 3, 1.
- 24) Xen., *Hell.*, VI, 4, 19-20.
- 25) Tod, 136.
- 26) 例えば, 森谷公俊『史学雑誌』92-11, p. 14。
- 27) F. H. Marshall, *op. cit.*, p. 19.
- 28) K. J. Beloch, *Griechische Geschichte*, Band 3-1, Berlin und Leipzig, 1922, p. 329.
- 29) P. ガーンジョィ, 松本宣郎・阪本浩訳『古代ローマ・ギリシアの飢饉と食糧供給』白水社, 1998年, p. 130。
- 30) M. I. Finley, *Economy and Society in Ancient Greece*, London and New York, 1988, pp. 167-175.
- 31) J. Heskell, *The North Aegean Wars, 371-360 B.C.*, Historia Einzelschriften Vol. 102, 1997, pp. 15-17.
- 32) Aeschin., II, 32-33.
- 33) Aeschin., II, 27-28.
- 34) J. Heskell, *op. cit.*, pp. 19-52.
- 35) J. Heskell, *op. cit.*, pp. 53-154.
- 36) N. G. L. Hammond, *Philip of Macedon*, Baltimore, 1994, pp. 122-139.
- 37) G. L. Cawkwell, *JHS* 101, p. 53 は先のミュティレネ人顕彰決議碑文 (Tod, 131) はアテナイの親スパルタの政策転換に対してではなく, アンフィポリス領有戦争に乗り出したことに対する同盟諸市内の不安を示すものであるとしている。
- 38) J. Heskell, *op. cit.*, pp. 94-100. Cf. Polyai, III, 10, 9; [Arist], *Oec.*, II, 23.
- 39) F. H. Marshall, *op. cit.*, p. 92; G. T. Griffith, *op. cit.*, p. 140; G. L. Cawkwell, *JHS* 101, p. 51 f.; 森谷公俊『西洋史学』129, p. 42。
- 40) J. L. Cargill, *op. cit.*, p. 150.
- 41) R. Sealey, *A History of the Greek City-States ca. 700-338 B.C.*, Los Angeles and London, 1976, p. 432.
- 42) Id., *Demosthenes and His Time*, p. 106 f.
- 43) 前377年から始まったアテナイ-スパルタ間戦争が長期化した結果, アテナイは軍資金不足に陥ったために, 前373年頃までにシュンタクシスが導入されたと考えられる。G. L. Cawkwell, *Historia* 12, pp. 91-93. しかし, 実際のシュンタクシスの金額がどの程度のものであったのか, 金額設定が同盟諸市の会議によって決定したものであったのか, あるいはアテナイが強制的に徴収したものであったのかといった, いくつかの不明な点が残されている。
駐屯軍・アルコンは, アテナイ-スパルタ間戦争中にエーゲ海島嶼部に設置されていたことが確認されているが, 375年の和約において駐屯軍の撤退が (Diod., XV, 38, 2), 372/1年の和約においては, 駐屯軍・役人の撤退が定められ, アテナイはこれに従った。前350年代に入ると,

アンドロス (Aeschin., I, 107), アルケシネ (Tod, 152) といった島嶼部において、駐屯軍及びアルコンの存在が確認されているが、これが同盟市戦争中の例外的な措置であったのか、あるいは同盟市戦争勃発以前から継続されていたものであったのかは不明である。

- 44) A. Kuhrt, *The Ancient Near East c. 3000-330 B. C.*, London and New York, 1995, p. 673.

ペルシアによるエジプト遠征は合計4回行われている。第1回は前386-384/3 (Isoc., *Panegyricus.*, 140), 第2回は前374/3年 (Diod., XV, 41-43), 第3回は前351-0年 (Diod., XVI, 40), 第4回は前345-344年 (Diod., XVI, 51)。第4回目の遠征によりエジプト回復に成功している。

- 45) Diod., XIV, 98.

- 46) Diod., XV, 9, 2.

- 47) Diod., XIV, 110, 6. 対キュプロス戦争の再構築については, C. Tuplin, *Achaemenid Studies*, Historia Einzelschriften vol. 99, 1996, pp. 9-15.

- 48) ダタメスの反乱に対する史料は、コルネリウス・ネポス『ダタメス伝』(XIV)に大幅に依拠することになるが、前360年代におけるダタメスの行動に関しては、不明瞭な点が多い。しかし、ダタメスが宮殿における嫉妬の対象となり、後に反乱を起こしたと思われる。

- 49) Diod., XV, 90, 3; 91, 2; Nepos., *Dat.*, 5. アリオバルザネスは、ダスキュレイオンの前サトラペスであったファルナバゾスの長兄であった。また、彼にはアバメー (アルタクセルクセス2世の娘, Plut., *Artax.*, 27) を母親に持つ、腹違いの弟アルタバゾスがいた。アリオバルザネスが反乱を起こした理由について、直接的に語ってくれる史料は存在しない。

R. A. Moyasey, *Greek Relations with the Persian Satraps: 371-343 B. C.*, Doctoral Dissertation to Princeton University, 1975, p. 78 f. は、アルタクセルクセス2世がアリオバルザネスに対して、ファルナバゾスの息子であり大王自身の孫にも当たるアルタバゾスにダスキュレイオンを譲渡するように勧告した。アリオバルザネスはこの勧告に激怒し、反乱を起こしたとしている。

しかし、M. Weiskopf, *The So-Called "Great Satraps' Revolt", 366-360 B.C.; Concerning Local Instability in the Achaemenid Far West*, Historia Einzelschriften vol. 63, 1989, pp. 26-64によれば、アリオバルザネスの反乱の原因は以下の通りである。アリオバルザネスがトロイア地方南部を領有していたことと、アビュドスのフィリスコス派遣に見られるようなギリシア問題における活躍に対して、リュディアのサトラペス、アウトフラダテスとの間に確執が生じた。アウトフラダテスは、アルタクセルクセス2世に対して、アリオバルザネスが「キュロスの再来」となる潜在性を持っていると吹聴した。そこで、自身の保身を考えたアリオバルザネスは反乱を起こすこととなった。また、アルタバゾスのダスキュレイオン譲渡勧告は、反乱の原因ではなく結果である。

いずれの説が正当であるかの判断はつけがたいが、アリオバルザネスは何らかの原因により、アルタクセルクセス2世に対し反感を抱いたものと思われる。

- 50) Diod., XV, 90, 1 は、前362/1年を反乱が勃発した年として設定している。しかし、ディオドロスの記述の一般的な特徴として、数年間にわたる出来事を、ある特定の年に凝縮して記すことが知られている。R. A. Moysey, *op. cit.*, p. 94 は、アリオバルザネス、マウソロス、タコス、アゲシラオス間での交渉はすでに、前363年頃から秘密裏に行われていたとしている。

- 51) Xen., *Anab.*, II, 4, 8; III, 4, 13; Plut., *Artax.*, 27.

- 52) ディオドロスは、オロンテスが「大いなる報酬と全沿岸地域のサトラピーを獲得したかったため」(Diod., XV, 91, 1)に裏切ったとしている。しかしオロンテスが実際に獲得した報酬がいかなるものであったかは不明であり、M. J. Osborne, "Orontes", *Historia* 22, 1973, pp. 515-551 は大サトラペス反乱の直後、オロンテスは死亡した可能性が高いとしている。

- 53) Diod., XV, 93, 1; Plut., *Artax.*, 30.

- 54) Plut., *Artax.*, 26-30.

- 55) Schol. Dem., IV, 19.

- 56) A. Kuhrt, *op. cit.*, pp. 672-675.

- 57) Diod., XV, 90, 4.

- 58) 375年の和約に関して, Xen., *Hell.*, VI, 2, 1 は条項の具体的な内容については触れておらず, またアテナイ・スパルタ以外の条約加盟国についての情報も与えてくれない。他方, Diod., XV, 38 は, より詳細な情報を与えてくれる。ディオドロスに従えば, 375年の和約はペルシア大王のイニシアティヴによって締結された。また, テバイはボイオティア同盟としての参加が認められなかったために, 条約加盟を拒否し, アテナイとスパルタは陸海の二元覇権を確認している。

371/0年の和約について, Xen., *Hell.*, VI, 3, 19-20 はアテナイ・スパルタの同盟国が条約に加盟し, ボイオティア同盟の問題が浮上したと述べている。Diod., XV, 50, 4 はこの条約がペルシア大王のイニシアティヴによるものであり, ボイオティア同盟の問題によりテバイは条約加盟を拒否したと述べている。

この2つの条約に関するディオドロスの記述は酷似しており, おそらくは彼の中で情報が錯綜していたと考えられる。375年の条約後もテバイは海上同盟に留まっていたことを考えると, テバイの条約加盟拒否は372/1年の和約に限定されるとみてよいであろう。また, アテナイ・スパルタによる陸海の二元覇権成立の確認は, テバイによる第一次ペロポネソス侵攻後にアテナイ・スパルタ間の同盟が成立した時 (Diod., XV, 67, 1) との混同であろう。Nepos., *Tim.*, 2 においても, 375年の和約締結時にアテナイとスパルタはそれぞれの覇権を認めたとする記述がみられるが, これはディオドロスとコルネリウス・ネボスの依拠する史料が, いずれもエフォロスであったためである。クセノフォンは372/1年の和約について詳らかにしているにもかかわらず, ペルシア大王のイニシアティヴについては語っていない。前374/3年にエジプト遠征がおこなわれていることを考えると, 375年の和約に限定すべきであろう。

- 59) フィリスコスの派遣について, クセノフォンとディオドロスとの二史料間に相違が見られる。クセノフォンによれば, フィリスコスを派遣した人物はアリオバルザネスであり, 会議が失敗した理由は, テバイがメッセネのラケダイモン帰属を承認しなかったためであるとしている (Xen., *Hell.*, VII, 1, 27)。他方, ディオドロスは, ペルシア大王であるアルタクセルセス2世がフィリスコスを派遣したとし, 会議が失敗した理由は, ボイオティア同盟の存在が認められなかったために, テバイが条約調印を拒否したからであるとしている (Diod., XV, 70, 2)。

前386年の段階において, アリオバルザネスはペルシア大王に対して公然と反旗を翻していたわけではない。よって派遣者がアリオバルザネスであることとペルシア大王であることには, 矛盾が存在しない。おそらく, ペルシア大王の指令を受けたアリオバルザネスがフィリスコスを派遣したのであろう。また, 失敗の原因に関して, 前370/69年にメッセネが建国されたばかりであるという背景を考えると, メッセネの帰属問題が焦点になったと考えられる。

- 60) Xen., *Hell.*, VII, 1, 33-37; Diod., XV, 81, 3; Plut., *Pelop.*, 30-31
 61) テバイがこのようにペルシアの好意を獲得できた理由として, クセノフォンは2つの理由を挙げている。第一点は, ペルシア戦争中にプラタイアの戦いにおいてペルシアを支援し, さらに前369年アゲシラオスの対ペルシア遠征を支持しなかったといった, ペルシア大王に対する長年の忠誠心である (Xen., *Hell.*, VII, 1, 35)。第二点は, レウクトラの戦いにおけるスパルタの大敗, およびその後のテバイの伸長である (Xen., *Hell.*, VII, 1, 36)。後者の理由の方が, より直接的な理由であろう。
 62) Xen., *Hell.*, VII, 1, 39-40.
 63) Diod., XV, 79, 1; J. Buckler, *op. cit.*, pp. 160-165.
 64) [Dem.], L, 6.
 65) P. Carlier, *Démosthène*, Paris, 1990, p. 87.
 66) Strab., VIII, 1, 2; XIII, 1, 58.
 67) Strab., XIV, 2, 23.
 68) Diod., XV, 2, 3.
 69) Diod., XVI, 36, 2.
 70) Diod., XV, 90, 3.
 71) R. A. Moysey, *op. cit.*, p. 173 f.
 72) 統合については, Strab., XIII, 1, 59. 遷都については, Strab., XIV, 2, 16; 2, 23 を参照。

73) S. Hornblower, *op. cit.*, pp. 107-137.

74) ここで引用した、デモステネスの弁論『金融組織論』(XIII)は、創作年代と著者の真偽という2つの問題点を孕んでいる。

弁論13番の設定は、同盟市戦争後、資金源からの収益をどのように分配するかについての討議をおこなうために開催された民会における演説である(1-3)。そして、演説中に弁論家は、自らがデモステネスであると述べている(12)。しかし、Loeb版のイントロダクションにおいて、編者のJ. H. Vince (1930)は、著者がデモステネスである可能性は極めて低いとし、デモステネス以外の人物の手による偽作であるとしている。この問題に対し、R. Sealey, *Demosthenes*, 1993, pp. 235-237は、この弁論が実際に民会でおこなわれた可能性は低く、後にデモステネスのてによって作られた虚構の作品であるとしている。

創作年代の特定について、同じくJ. H. Vinceは、『ロドス人の平和のために』(XV)よりも後、すなわち前350年前後であるとしている。この点に関して、G. L. Cawkwell, "Anthemocritus and the Megarians and the Decree of Charinus", *Revue des Études Grecques* 82, 1969, p. 328 f. は、ロドス民主派がアテナイに救援要請をおこなった形跡が見られないことから、弁論15番、すなわち前351/0年以前の作品でとし、また、フィリッポスの脅威が感じられないことから、前352年以前の作品であるとしている。

75) アリストテレス、牛田徳子訳『政治学』京都大学学術出版会、2001年、p. 255より引用。

76) Diod., XVI, 22, 1-2.

77) Aeschin., II, 70は、75の同盟国を喪失したと述べている。

78) 同盟市戦争後、海上同盟として活動を確認できるのは、前346年、フィロクラテスの和約に先行する会議における一回のみである。しかし、その場における同盟議会の果たした役割は、アテナイの決定に従うだけの付随的なものであった。

79) 第三次神聖戦争におけるフィリッポスの介入と、その後のマケドニアによるギリシア南下政策については、森谷公俊「第三次神聖戦争の勃発とテッサリア連邦」『史学雑誌』104-6, 1995年, pp. 34-54。

《Summary》

The Relationship between the Athenian
Confederacy and the Persian Empire
in the Fourth Century B. C.

Takuji ABE

After two great wars — the Peloponnesian War and the Corinthian War — it was Sparta that held supremacy over the Greek states. In 377 B. C., against the Spartan hegemony, Athens formed a military alliance with Byzantium, Kios, Rhodes, Thebe and so on. This alliance, which is generally called the Second Athenian Confederacy, collapsed in 355 B. C. when Athens was defeated in the Social War. But it finished in its entirety in 338 B. C. when Philip of Macedon conquered the Greek states.

Many scholars of the Second Athenian Confederacy, and especially of its foreign policies, had considered the alliance as “the Second Empire”, or recovery of the Delian Alliance. In the 1980s, however, J. L. Cargill denied its significance as the Second Empire with his reexamination of historical sources. He argued that Athens had never acted against the rules agreed upon when the alliance was established.

These views focused firstly, on the relationship between Athens and the Greek states, and secondly on the relationship between Athens and the Persian Empire. But, since the Peloponnesian War and throughout the 4th century B. C., Persian kings and satrapes sometimes intervened in the affairs of Greek states, either directly or indirectly. The so-called King's Peace, concluded as the peace of the Corinthian War, shows us that Persian kings were very influential in the Greek states. The author analyzes the Athenian foreign policies, giving careful consideration to the Achaemenid Empire.

The author mainly pays attention to the political aims of two Persian kings — Artaxerxes II and Artaxerxes III — and analyzes the changes in the Greek world. As a result, though Persian kings were careful to prevent Greek states intervening in Asia Minor, they had no interest about which states dominated the Greek world. The author reaches the conclusion that the disruption of the subtle balance between the Persian Empire and the Greek states made one of the turning points of transition from the Classic period to the Hellenistic period.